はなやか関西～文化首都年～2011「茶の文化」

非公開茶室の見学

実行委員会が実施する取組
非公開茶室の見学（東山コース）を開催しました。

平成 23 年 10 月 5 日（水）
参加者　29 名（「募集要項」に基づきご応募いただいた方から抽選）

【集合・受付】

黒谷・金戒光明寺、高麗門に集合。
実行委員会委員長の堀井良殷（ほりいよしたね）氏（財団法人大阪 21 世紀協会理事長）挨拶。解説案内者紹介。

◎中村　昌生（なかむら　まさお）　氏（京都工芸繊維大学名誉教授、財団法人京都伝統建築技術協会理事長、茶の湯文化学会参与）
1927 年愛知県生まれ。現在、京都工芸繊維大学名誉教授、福井工業大学名誉教授。多年にわたり日本建築の伝統追求のため茶室・数寄屋の研究に専念。この間日本建築学会賞、日本芸術院賞など受賞。伝統建築技術の継承発展のため、同志と財団法人京都伝統建築技術協会を設立し、現在理事長をつとめる。多数の著書の中で「図説茶室の歴史 基礎がわかる Q&A」、「数寄屋と五十年」（淡交社刊）などが入手しやすい。作品集に「数寄の空間」（淡交社刊）等。
◎岩崎（いわさき）　正彌（まさや）　氏（実行委員会アドバイザー、皇學館大学現代日本社会学部伝統継承文化創造コース准教授、茶の湯文化学会理事）

堀井実行委員長

中村昌生氏

岩崎アドバイザー

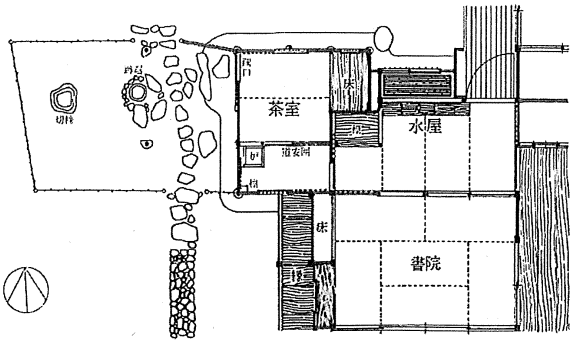
【金戒光明寺（こんかいこうみょうじ）　西翁院（さいおういん）　茶室澱看席（よどみのせき）（重要文化財）】

西翁院は黒谷（金戒光明寺）山内の塔頭（たっちゅう）。
藤村源兵衛（十二屋）が天正年間に建立。現本堂は当時のものと伝えられる。十二屋は藤堂家出入りの呉服商であった。千利休の孫、千宗旦(1578～1658 年)四天王の一人といわれる藤村庸軒（ふじむらようけん）の養祖父に当たる。庸軒が本堂の西北に貞享 2～3 年（1685～1686 年）頃に造立した茶室であり、はるか淀・山崎方面を遠望できる景勝の地であることから、「澱看席」といわれている。
三畳敷で宗貞囲（そうていがこい）と呼ばれる珍しい構成をそなえ、侘茶（わびちゃ）の雰囲気に溢れた茶室である。

住職による寺の由来の説明

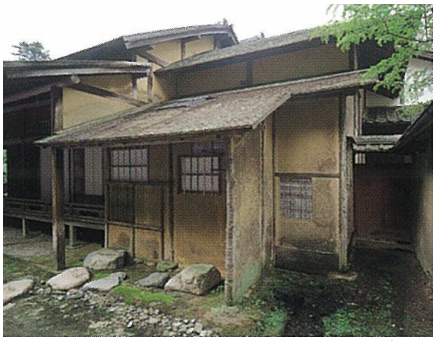
中村氏が茶室の総括説明

岩崎氏による庭の説明



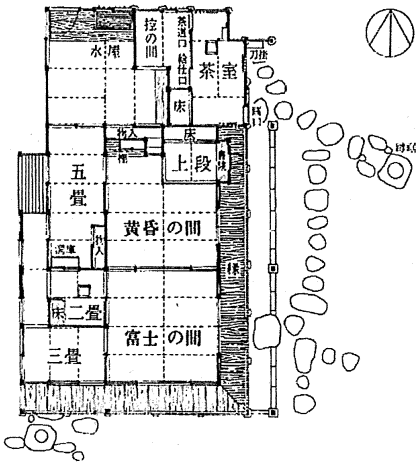
出典：中村昌生著『茶室大観Ⅰ』(創元社刊)

【曼殊院（まんしゅいん） 茶室八窓軒（はっそうけん）（重要文化財）】



出典：曼殊院絵はがき

寺の由来などについて
曼殊院　北野氏より説明



出典：中村昌生著『茶室大観Ⅱ』(創元社刊)

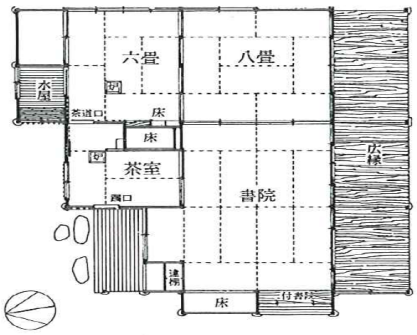
曼殊院は竹内（たけのうち）跡と呼ばれ、京都御所を中心とした公家町にあったが、明暦2年（1656年）良尚法親王（りょうしょうほう）の時、一乗寺の現地に移った。
大書院・小書院（重要文化財）は江戸初期の数寄屋造りの名作として知られる。
小書院の背後の茶室が八窓軒で、横に長い三畳台目で、八つの窓をそなえる。
中柱には桜皮付丸太を立て、床の天井が高い。
良尚法親王は桂離宮を建てた八条宮二代智忠親王の弟に当る。
庭園も枯山水の名作である。

【昼食「弁天茶屋」名代門跡そばセット】

【南禅寺（なんぜんじ） 金地院（こんちいん） 茶室八窓席（はっそうのせき）（重要文化財）】

南禅寺の塔頭金地院は、「黒衣の宰相」として知られる以心崇伝（いしんすうでん）によって建立された。
崇伝が小堀遠州（こぼりえんしゅう）に依頼してつくられた金地院本堂（方丈）前の庭と茶室が現存する。
茶室は方丈背後の小書院に付属して建てられた三畳台目で、勝手と水屋が付属する。縁から躙口（にじりぐち）を入る形式、床と点前座（台目畳）を並べ、窓が大きくあけられ、客座と書院が直接つながれているなど、遠州らしい作風がよく残されている。
本堂（重要文化財）は伏見城より移したという説もあるが、江戸初期に建立された。

金地院大方丈

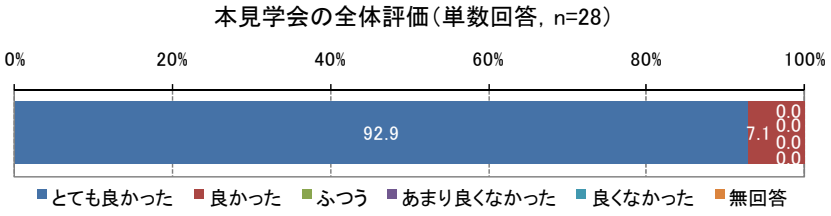


出典：中村昌生著『茶室大観Ⅲ』（創元社刊）

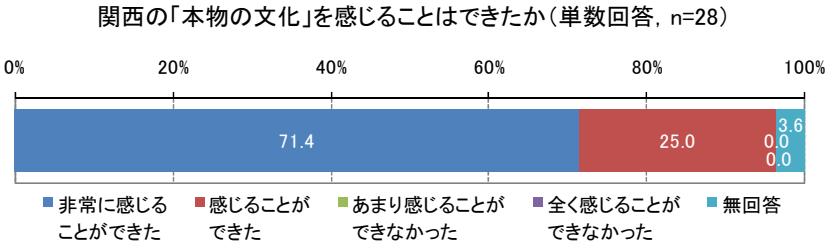
【閉会】

アンケート記入、回収のあと解散。

今回の見学会全体を通しての評価は「とても良かった」92.9%、「良かった」7.1%で、全ての人が良かったと答えている。



今回のプログラムを通じて、関西の「本物の文化」を感じることはできたか、という問いに対しては、「非常に感じることができた」・「感じることができた」合わせて 96.4%の人が感じることができたと答えた。



はなやか関西 文化首都年